

めとてラボ デフスペースリサーチ



デフスペース
DeafSpace

ろう者の身体感覚から考える空間

はじめに

2023年10月、東京・西日暮里に手話者のための文化センター5005（ごーまるまるごー）がオープンしました。ここでは、日本で初めて「デフスペースデザイン（DeafSpace Design）」の概念を取り入れた空間全体の改修や家具設計が行われています。その空間を実際に体験することで、ろう者の身体感覚を見つめ直す機会が生まれ、デフスペースという考え方が広く知られるきっかけとなりました。

デフスペースとは、ろう者の感覚、視覚・触覚・嗅覚や独自の行動様式、そしてろう文化などを生かすデザインのこと。

ろう者は、音声言語とは異なり、視覚を基盤とした手話を用いてコミュニケーションを行っています。また、周囲の状況を把握する際にも、視覚や振動といった身体感覚が重要な役割を果たしています。こうした感覚の違いから、空間の使い方や居心地の感じ方は、聞こえる人とは異なることがあります。その違いは単なる好みではなく、ろう者の身体感覚やコミュニケーションのあり方と深く関係しています。しかし、これまでの建築や空間づくりでは、「音が聞こえないこと」への配慮に目が向けられる一方で、身体感覚や行動の特徴は、十分に意識されてきたとは言い難い状況がありました。

めとてラボの一環として実施しているデフスペースリサーチでは、こうしたろう者の身体感覚やそれに基づくデフスペースの考え方を、ろう者を含むさまざまな人に知ってもらいたいと考えています。

この冊子では、デフスペースを紹介するだけでなく、ろう者の暮らしや身体感覚を整理し、他者と共有するための「言語化の手がかり」となることを目指しています。この冊子が、ろう者の空間について考える小さなヒントとなり、対話のきっかけになることを願っています。

めとてラボ・デフスペースリサーチチーム
福島愛未



01 はじめに

02 デフスペースデザインとは

03 デフスペースデザインの5つの区分

04 ギャロデッド大学の事例

06 世界のデフスペース

08 めとてラボのデフスペースリサーチ

その1 名づけられる前のデフスペースを探して

10 ・みんなで楽しめる家

18 ・目で聴く家

26 ・気配を感じる家

その2 公共の場に自分たちのホームをつくる

34 ・自分たちのホームをつくる

40 デフスペースを考え、深める

42 DeafSpace Design ろう者の身体×家

44 DeafSpaceのある暮らしをコラージュをしよう

46 おわりに

デフスペースデザインとは

ろう者が集まる空間には、国や時代を超えて共通するいくつかの特徴が見られます。人の顔や手話が自然に見えるよう、家具等の配置が工夫されていることや、視野が遮られにくい動線があること、光の入り方への工夫があることなどです。これらは、ろう者が日々の暮らしの中で自分たちで工夫しながら作り上げてきたもので、ろう者からろう者へと少しずつ受け継がれてきました。

このような空間のあり方に「デフスペース (DeafSpace)」という名前が与えられ、体系的に整理されるようになったのは、2000年代に入ってからのことです。そのきっかけとなったのが、アメリカのワシントンD.C.にあるギャロデット大学 (Gallaudet University) で進められたプロジェクトでした。

ギャロデット大学は、1864年に世界で初めてろう者のために設立された大学で、学生だけでなく、教職員やスタッフを含む多くのろう者が学び、働く場所です。2005年にこの大学で「Sorenson Language and Communication Center (SLCC)」という新しい建物を建設する計画が立ち上がり、その過程で、ろう当事者が参加するワークショップが2日間に渡って行われました。このワークショップの中で、ろう者同士が空間の感じ方や行動の仕方において、共通した感覚を持っていることが明らかになりました。

このろう者の共通感覚については、その後、2006年に「デフスペース・プロジェクト (DeafSpace Project)」として検証が進められ、2010年には「デフスペースデザインガイドライン (DeafSpace Design Guideline)」として整理されました。その後は、ギャロデット大学のキャンパス全体で、デフスペースデザインの考え方を取り入れた環境づくりが進められています。



Sorenson Language and Communication Center (SLCC)

ろう者の身体感覚を中心に据えて考える

デフスペースが、従来のバリアフリーやユニバーサルデザインと大きく異なるのは、その出発点にあります。これまでの多くの配慮は、「聞こえないこと」を困難として捉え、その不便さを後から補う考え方に基ついてきました。一方、デフスペースは、ろう者の身体感覚や文化を前提とし、そこから空間を構想します。聞こえる人を基準とした空間に調整を加えるのではなく、異なる身体感覚そのものを中心に据えて考える試みだと言えます。

こうした空間の工夫は、ギャロデット大学で初めて生まれたものではありません。アメリカに限らず、ヨーロッパや日本を含むさまざまな地域で、ろう者は以前から、自分たちの暮らしや感覚に合わせて空間を工夫してきました。

ろう者の家について研究したMatthew Malzkuhnは、このような取り組みを「文化的カスタマイズ (Cultural Customization)」と呼び、ろう者が自らの必要に応じて空間をつくり替えてきた実践として紹介しました。



Gallaudet University

デフスペースの5つの区分

ギャロデット大学は、ケーススタディやワークショップを踏まえて、ろう者と建築との相互の働きかけを5つの区分に分け、提示しました。以降のページでは、この区分に沿って、各デフスペースを読み解いていきます。

空間と近接 Space & Proximity



手話で会話をするには、安定したアイコンタクト、腕を十分に動かせる広さ、視界をさえぎらない環境が欠かせません。また、手話の動きや表情をしっかりと見るためには、少し余裕のある距離も必要です。さらに、ろう者が集まると自然と円や弧の形に並ぶことが多いため、デフスペースでは視線がつながりやすい空間づくりが大切です。

感覚範囲 Sensory Reach



ろう者は、音の代わりに、目で見ること、振動を感じることで、触れること、人と感覚を共有することによって、全方向の状況をとらえています。デフスペースでは、この感覚の広がりを支える空間づくりが大切です。視線がつながる空間や反射の工夫、振動への配慮は、安心してまわりを感じ取る助けになります。

移動と近接 Mobility & Proximity



手話で会話をしながら歩くろう者にとって、安心して移動できる環境はとても大切です。デフスペースでは、広めの通路や滑らかにつながる動線をつくることで、移動と会話が自然に続く空間を目指します。スロープや階段、出入口や交差点のつくり方は、歩きやすさだけでなく、会話が止まらないことにも関わっています。

色と光 Color & Light



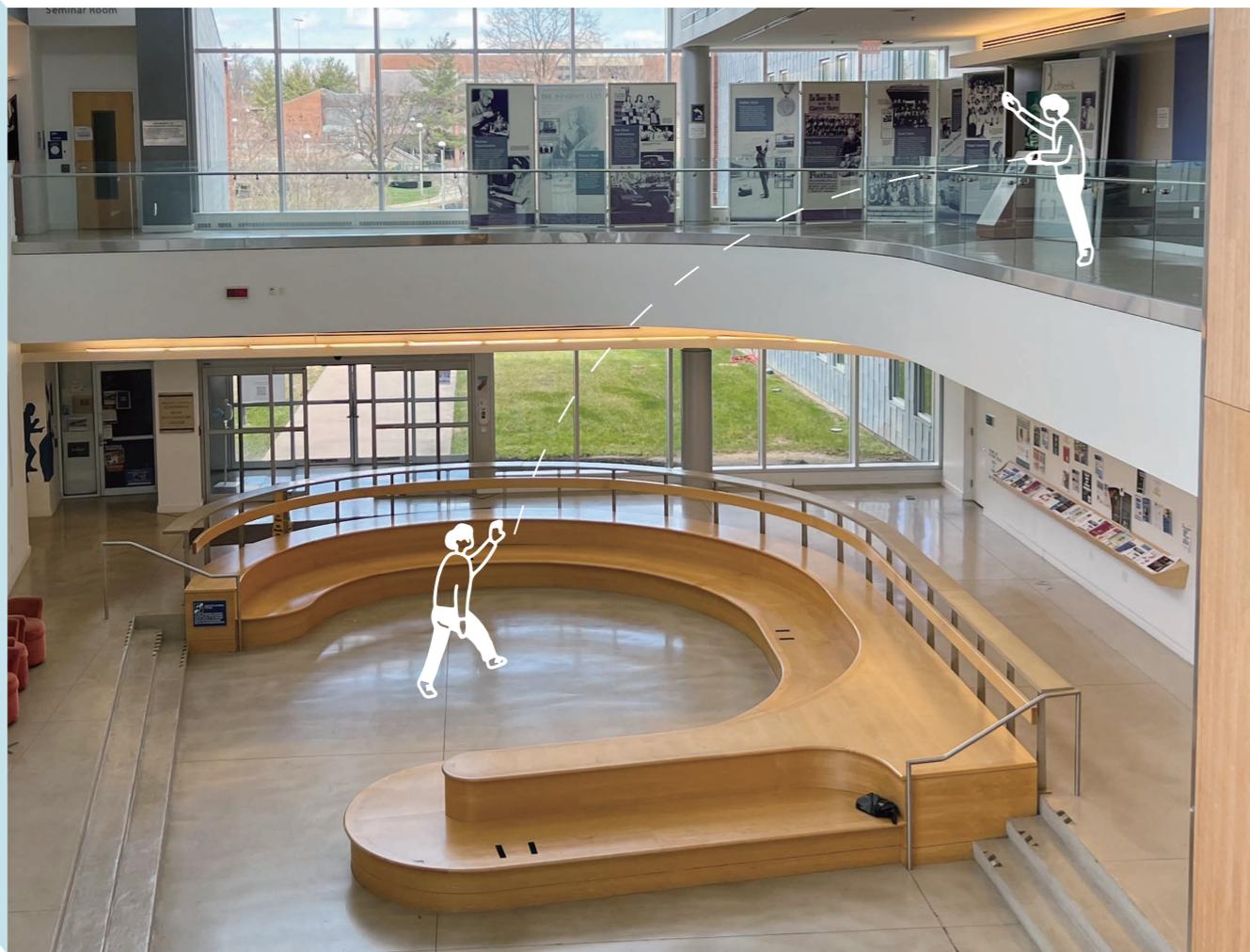
目を素早く動かし、空間を理解しながら会話を行うろう者にとって、光や見え方の環境は、話しやすさや安心感に大きく関わります。適切な光と色の工夫は、目の疲れを減らし、見やすい環境をつくれますし、やわらかく広がる自然光は、表情や手の動きを読み取りやすくします。照明も、まぶしさや逆光を抑えることが重要です。

音響と電磁干渉 Acoustics and EMI



補聴器や人工内耳を使う人にとって、静かで安定した音の環境は大切です。残響や機械音、外からの騒音は集中をさまたげ、会話を困難にします。そのため、部屋の使い方や配置、吸音・遮音の工夫が必要です。また、電磁場も補聴器に影響するため、照明や電子機器を使う時には干渉が少なくなるよう計画することが重要です。

ギャロデット大学のデフスペース事例

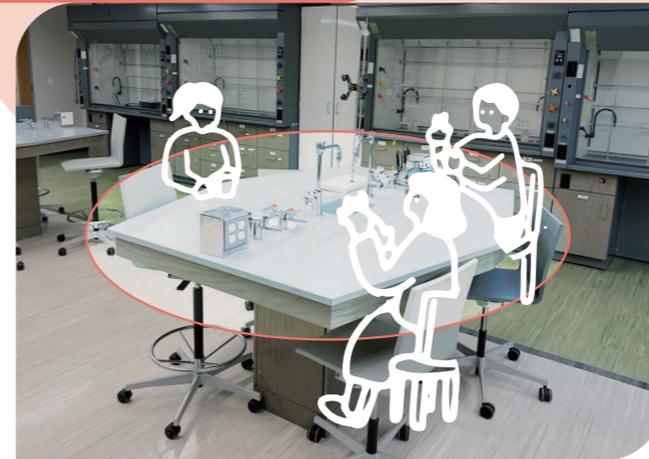


デフスペースの概念が生まれるきっかけとなった SLCC は、1階から3階まで視線が通る開放的な構成により、上下階の人の動きや気配を視覚的に把握しやすい空間となっています。建物内にはガラス張りのエレベーターが設けられ、内外から手話で会話ができるなど、緊急時も含めた視覚的コミュニケーションが可能です。中央には、ろう者が自然

と輪になって会話する行動特性を反映した円形の木製ベンチが配置され、座面に段差を設けることで、どの位置からでも手話が見やすい環境を実現しています。一方で、ベンチのスケールによる距離感や、開放的な構成による音の反響など、補聴器・人工内耳装用者にとっての課題も指摘されているようです。

机のかたちと角度

実験室にある六角形の机は、一部に角度がついているので、無理に体をひねることなく、自然な姿勢のまま全員の顔や手話を見渡すことができます。



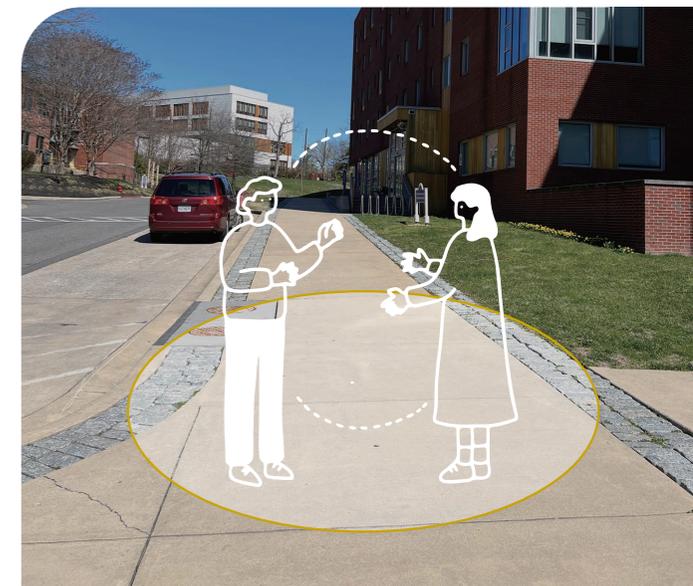
プライバシーと気配

半透明のガラスはプライバシーを保ちつつ、気配を感じ取れる視認性を確保しています。



大学内のさまざまな工夫

ギャロデッド大学内のさまざまな工夫をみてみましょう。手話で居心地良く、安全に会話を楽しめる工夫がいたるところにみられます。



素材のちがう歩道

手話で会話をしながら歩くと足元への注意が薄れ、段差から落ちてしまうことがあります。素材の違いを感じることで車道の存在に気づくための工夫として敷地内の歩道の端に異なる素材を用いています。

床の素材と振動

カーペットは振動をやわらげ、手話に集中しやすい環境をつくります。

世界のデフスペース

デフスペースという言葉が生まれる以前から、世界各国ではろう者自身による空間の工夫が実践されてきました。ここではデフスペースリサーチチームの福島がこれまでに訪れた世界中のデフスペースの中から、特に印象深かった取り組みをご紹介します。

Døvefilm in コペンハーゲン、デンマーク

Døvefilm (ドゥーヴァフィルム) は、1963年にデンマーク・コペンハーゲンで設立された、ろう者のためのテレビ番組や映像作品を制作するメディア会社です。ろう者と聴者が協働し、デンマーク手話によるニュースや文化番組、ドキュメンタリーなどを制作し、ろう文化や手話言語の発信に重要な役割を果たしています。

※現在は別の場所へ移転している。

視覚的なつながり

拠点としている機関車修理工場を改修した空間は、ガラス張りの仕切りや広い視界によって互いの顔や手話が見やすく、視覚的なつながりが保たれる空間になっています。



背後がみえる大きな鏡



ドアに背を向ける配置には大きな鏡を設置し、背後の人の動きや気配を鏡で確認できるよう工夫されています。



希望者には個人のデスクにも小型の鏡が用意されるなど、安心感を支えるさまざまな工夫があります。

Senza Nome

in ボローニャ、イタリア

イタリア、ボローニャには大人気のバル、Senza Nome (センツァ・ノメ) があります。ろうコミュニティでイベントなどを企画してきたろう者のオーナーが、既存の空間がろう者の身体感覚に合わないと感じたことをきっかけに、「自分たちに合った空間」をつくり、会話を広げていくためにひらいたそうです。空間内には、言語や身体を尊重した工夫や、手話でオーダーするためのイラストカードなど、手話や文化を活かす仕組みが随所に散りばめられています。



揺らせるライト

この大きなペンダントライトは、店内外で待つお客さんを呼ぶためのものでもあります。ライトを揺らし、光を使って呼ぶのだそうです。

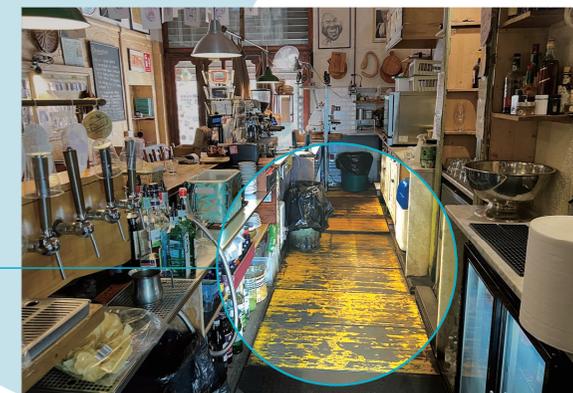


死角を防ぐ鏡

バーカウンター内の死角になりやすい部分には鏡を設置し、視覚的な情報を補うことでスタッフ同士のコミュニケーションを円滑にしています。

振動で呼ぶ

カウンター内の床には木の板が用いられ、床を踏んだ振動で相手を呼ぶ、ろう者の呼びかけ方が活かされています。



めとてラボのデフスペースリサーチ

その1 名づけられる前のデフスペースを探して

めとてラボのデフスペースリサーチは、日本ならではのデフスペースを探していくことを目指して活動を開始しました。きっかけは、めとてラボのメンバーのひとりが生まれ育った家に、デフスペースの工夫やアイデアが詰まっていることを知り、実際に訪問したこと。自分たちのために、家族との暮らしのために、つくっていく家。そこには、手話という言語や身体から生まれた日々の工夫やアイデアが詰まっていた。

「デフスペース」という名前ができる前から、それぞれが創意工夫してつくってきたデフスペースの工夫が各地にあります。デフスペースという言葉はアメリカで生まれましたが、建築様式は国によって異なるため、それぞれの国の文化や生活様式から成る「家」があるはずです。だからこそ、めとてラボでは身近な「家」をテーマに、リサーチをはじめました。

ここでは、そうしたリサーチの中で訪れた3つの家を紹介します。それぞれに、その家族ならではの工夫があると同時に、家を超えて共通する工夫がいくつも見られることがわかります。どんな創意工夫が隠れているのか、その理由はなぜなのか、想像を巡らせながらご覧ください。



ケース①

みんなで楽しめる家 →P10



家族で10年かけてつくっていった家。外国のろう者や友人たちが来て手話でおしゃべりを続けられるような工夫がなされています。

ケース②

目で聴く家 →P18



建築家と協働しながらつくりあげた家。子どもたちとの関わり方をもとに検討した設計や、自然に情報を取り込む日本的な工夫があります。

ケース③

気配を感じる家 →P26



格子や障子などを工夫として取り入れた家。日本的な建築様式が、気配を感じることで、とても相性いいことが伺えます。



その2 公共の場に自分たちのホームをつくる

「家」をテーマに取材やインタビューを重ねるなかで、「家」をつくることは自分たちの身体感覚や言語、そして関係性を大切にしていく行為であることが、わかってきました。

「言語の保存や文化を耕していくためには、いつでも話せる・集まれる場所が必要だ」。そうした思いから、わたしたちは、デフスペースリサーチで集めてきた様々な工夫を反映しながら「ホーム」となる

場所をつくっていくことにしました。

西日暮里にオープンした5005は、めとてラボがデフスペースリサーチで集めてきた様々な家の工夫や発見を取り込みながらつくった文化センターです。どのような方法でこの場所ができたか、ぜひご覧ください。

名づけられる前のデフスペースを探して

ケース

①

みんなで楽しめる家

建築面積：約62.43m²
建築年数：築23年



どこにいても手話で会話のできる家

住まいづくりは、この家族のお母さんが設計者に自分たち家族の暮らし方を伝えるところから始まりました。家を建てるにあたり、聴者の設計者に生活スタイルやろう者の身体感覚、住まいに求める雰囲気を理解してもらうため、イラストやメモ、冊子の切り抜きなどをスケッチブックにまとめ、視覚的に共有していったといいます。

「どこにいても家族の存在が感じられること」「すべてを見せるのではなく、適度なプライバシーが守られていること」。そうした具体的なニーズを、言葉だけに頼らず、視覚的なツールを通して丁寧に伝えていきました。

また、海外旅行先のイタリアで訪れたろう者の住まいからも多くのヒントを得たそうです。当時はまだデフスペースという言葉はありませんでしたが、ろう者が暮らしやすい工夫として心に残っていた空間体験が、この家の計画にも生かされています。

世界各国、日本国内からろう者が集い、みんなが手話で語り明かす、そうした居心地の良さを、この家の柔らかなで細やかなデザインの工夫がつくりだしています。



照明の明滅で家族を呼ぶ

1階にすべての部屋の照明スイッチがまとめられています。このスイッチを使って、2階の子ども部屋、書斎、寝室の照明を明滅させ、家族を呼ぶことができます。

手話での会話を支える吹き抜け

1〜3階までが吹き抜けになっていることで、キッチンから家族がどこにいるかを確認でき、どこにいても手話で会話することができるようになっています。



段差による会話空間の設計

リビングに置かれている丸いテーブルは、家の中心となり、多くのろう者が集まっても、和室の小上がりや階段に座ることで、お互いの顔や手話をみて会話することができます。



デフアート

階段に飾られている木彫りのアートは、タイ旅行中に会ったろう者が作ったデフアート。家の中には様々なデフアートが飾られており、ろうコミュニティとのつながりを感じることができます。



アーチの形

アーチの形は、見通しの良さを確保しながらも、洗面所で歯磨きや化粧をしている様子が見えないように工夫されています。





伝える工夫

デフスペースを作っていく際、設計者とのコミュニケーションのために作られたスケッチブック。雑誌の切り抜きにイラストを加え、自分たちの身体感覚やこだわりを共有していきました。



透明な庇(ひさし)

来客があった際、2階から玄関を見下ろしても庇(ひさし)が邪魔にならず、誰が来たのかを確認することができます。

引き戸で安全に

この家では、リビングの開き戸以外は、全て引き戸を採用しています。また使わない時は開けばなしにするというルールがあります。このルールは、ろう者が使用する建物や家でよく見られる光景でもあります。



情報の視覚化

ろう者は、開き戸付近で衝突してしまうことがよくあります。このリビングのドアは、透過性のある素材を取り入れることで視覚的に情報を得て、衝突を防ぐ工夫をしています。

筆談で向かい合うためのカーブ



玄関のタイルの段差部分をカーブにすることで、来客と向かい合って筆談ができ、顔を見ながら話すことができるようになっています。



フラッシュライト

インターフォンが鳴ると光でお知らせしてくれるフラッシュライト。多くのろう者の自宅にも設置されています。

名づけられる前のデフスペースを探して

ケース

②

目で聴く家

建築面積：約29.75m²
建築年数：築17年





子どもたちの安全を「目」で守る

「目で聴く家」というテーマは、ろう者の夫婦と、聞こえる建築家が対話を重ねる中で生まれました。当時は「デフスペース」という言葉が広まる前でした。家族の生活に真摯に向き合い、ろう者の生活様式やコードの子供たちに最適な空間を追求した結果、その設計には必然的に多くのデフスペースが取り込まれていました。

仕事部屋、トイレ、階段、子供部屋が並ぶ2階は各室を仕切る壁の高さがほぼ90cmに統一されています。上部を開放することで、家中を視線が届く「窓」のような空間にしているのです。

この斬新な設計は、家を建てた当時まだ小さかった子供たちの安全を「目」で守る、家族がどこにいても「手話」でコミュニケーションを取れるという、ろう者の親ならではの知恵が形になったものです。子どもの成長に合わせて壁やドアを後付けして個室化できる構造になっていますが、現在は和紙をあしらった最小限の仕切りのみで過ごしています。

子どもの成長に寄り添いながらも、どこにいても互いの存在を感じられる開放的な空間になっています。

子供が見渡せる机の位置

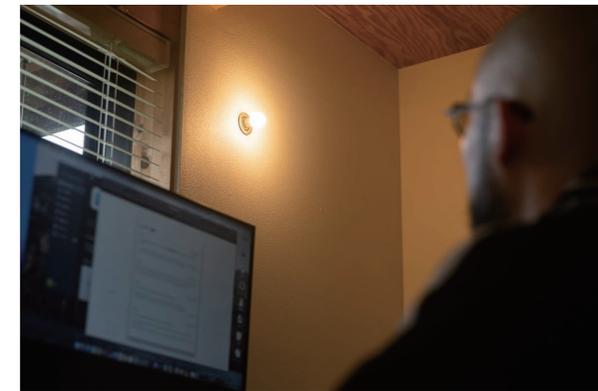
書斎机を壁向きから室内を見渡せる位置へ。子ども部屋や廊下の様子が把握でき、家族を感じながら安心して作業できる空間になっています。



2つの役割を持つスライド式のドア



2階の階段横のトイレのドアはスライド式で、昼は「トイレの目隠し」、夜は「階段の転落防止」の役割を兼ねています。



明滅することで人を呼ぶ照明

1階から照明を明滅させることで2階にいる人を呼び出すことができます。明滅の速さで、緊急性を伝えることも可能です。



家族と顔を合わせられる階段

階段をリビングに取り込むことで、キッチンやリビングにいる親と子供が、日常的に顔を合わせられる配置になっています。

階段の透明な蹴込板(けこみいた)

階段の蹴込板を透明にすることで、移動する様子が外から把握でき、リビングからでも階段越しに手話でコミュニケーションを取ることができます。



目が届く配置

キッチンと浴室が向かい合う配置になっているので、脱衣所の引き戸を開ければ家事をしながらでも子供の様子に目を配ることができます。



外部の情報を得られる外壁

風通しが良く小動物も出入りできます。環境に優しいだけでなく、通行の様子など外部の情報を視覚的に得ることができます。



半分のガラス

ドアの半分をガラスにすることで、訪問者の情報を得やすくしています。



気配を伝える欄間(らんま)

欄間(らんま)を通る光や風、隣室の明かりが作る影。それらが家族の入浴や起床といった気配をさりげなく伝え、互いの行動をさりげなく共有させてくれます。



情報を届ける採光

採光で室内を明るくするだけでなく、様々な視覚情報を得ることができます。揺れる木の影の動きから風の強さを知る日もあれば、緊急車両の赤いランプの光から、近所で起きた出来事を察知したことも。



名づけられる前のデフスペースを探して

ケース

③

気配を感じる家





光や影で気配を感じる家

この家は、一級建築士の資格をもつろう者のHさんが、幼い子供を視覚的に見守ることのできる住まいをと、自ら設計に関わり建てたものです。

大学で建築を学び、以前からろう者のための空間について考えていたHさんは、住まいづくりに向き合うにあたり、家族の「気配」を感じられることを大切にしました。日本建築の発想をもとに、光や影、視線の抜けを通して人の存在が自然と伝わるような工夫が随所に施されたこの家は、多くのデフスペースの考え方によってかたちづくられています。

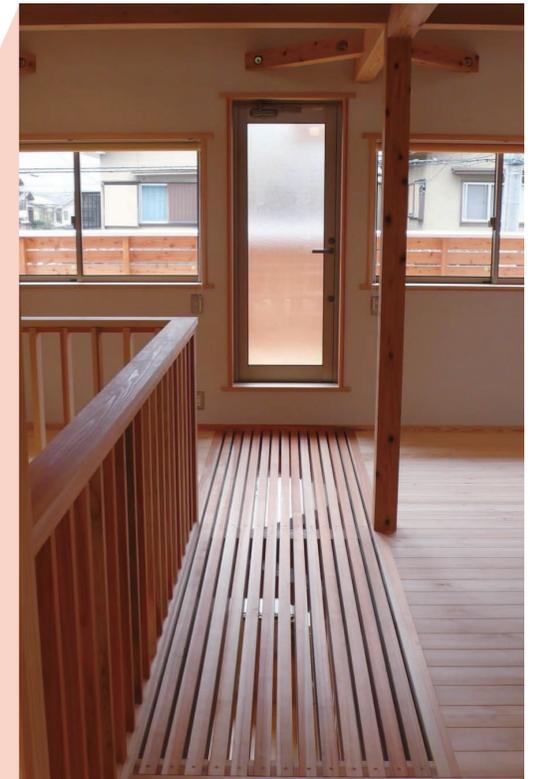
オープンキッチン

キッチンはオープンキッチンとなっており、玄関と和室の障子の影の動きから、誰かが帰ってきたことがわかるようになっています。



気配を感じるすのこ

2階の廊下の一部には、すのこ床を採用。これは、京都の町並みにある格子からヒントを得たものだそうです。完全な視認性はないものの、1階から2階にいる人の気配を感じ取ることができます。



人の気配が伝わるという良さがある一方で、ホコリが階下に落ちてしまったり、コーダの子ども達には音が気になったり、年月を重ねるうちに木が少しずつ反るようになりつまづきやすくなったりと、いくつかの課題も出てきました。そのため、吹き抜けを埋めて部屋を作るタイミングで、このすのこは撤去したそうです。



影が映る障子や欄間

1階には小上がりを備えた和室があり、開口部には障子戸が設けられています。ドアを閉め切っても、欄間からこぼれる光や障子に映る影によって、人の気配を感じ取ることができます。

階段の蹴込みをなくす

階段の蹴込みをなくし、誰かが上にあがっていく様子が視覚的にわかるようにしています。





視線の通り道を作る

階段の蹴込みをなくし、キッチン横の壁を格子とすることで、空間に視線の通り道をつくり、人の気配を感じ取りやすくしています。また、衝突の防止にもつなげています。

吹き抜けの格子

1階と2階の吹き抜けには、手すりに、縦格子(縦棧)が設けられており、空間の抜けを保ちながら視認性を高めています。そのおかげで、家のどこにいても子どもの様子を視覚的に把握することができ、家族が安心して過ごすことができます。



パッシブソーラーシステム

吹き抜けの家で課題となりやすい「寒さ」に対しては、建物の設計の工夫によって自然エネルギーを活用する技術を取り入れ、室内の温度を一定に保っています。



公共の場に自分たちのホームをつくる

自分たちのホームを作る



居心地のいいホームを作るために

手話と出会いの文化センター5005をスタートするにあたって、デフスペースとは何かを学び、どんな場所にしていきたいかというアイデアワークショップを建築家、ろう者・コーダ・通訳チームとともに実施し、探求を進めていきました。デフスペースとは何かを学んだのち、どんな机の形がいいか、ドアからの導線をどうするか、撮影ブースとしての壁の活用など、具体的な案や可能性が次々出てきました。同時に、コワーキングスペースとして使う場合、手話だと話の内容がみえてしまうなどの課題もでてきましたが、株式会社リリカラさんからの協賛のもとデフスペースとしての活用を前提としたカーテンの選定(人がいることはわかるが、手話の内容はみえない透過度のカーテンは何か等)を試行錯誤しながら進めていきました。

空間構造をつくる過程でも、手話通訳者を交えて、イメージや模型を活用しながら、デフスペースとは何か、どんな工夫ができるといいのかを相談しながら、アイデア出しをしていきました。「見やすい手話のためには光が大切なので、照明を動かしたら面白いけど...」という意見から、フックで動かせる照明をつくり、ワイヤーを天井に張り、カーテンや吊り物を自在に動かせるようにするというインテリアとしての工夫もできました。突拍子もないアイデアでも、建築・デザインチームとともに“つくる”というプロセスの中で実現させ、可能性が一層広がっていく制作プロセスになりました。

模型を動かしながら考える

模型を実際に動かしながら、トークイベント型、舞台型、ワークショップ型など様々な状況を想定しながら空間の活用を考えていきました。



現場の下見

駅から場所まで手話で会話できる道幅か、センターへの入り方など細かく確認しながら想像を膨らませていきました。

デフスペースを学ぶ

この時、建築家やデザイナーの方、ろう学校の先生や文化芸術の担い手など、5005を育てていくメンバーと具体的なイメージを共有していきました。



ワークショップの実施

図面をみんなでみながら、どんな動線がいいか、どんなふうな構造が作れるかを議論。

実験をする

プライバシーの課題など出てきた点を実際のカーテン等を通して実験しながら、探っていきました。



5005のいろんな発明をみてみよう。

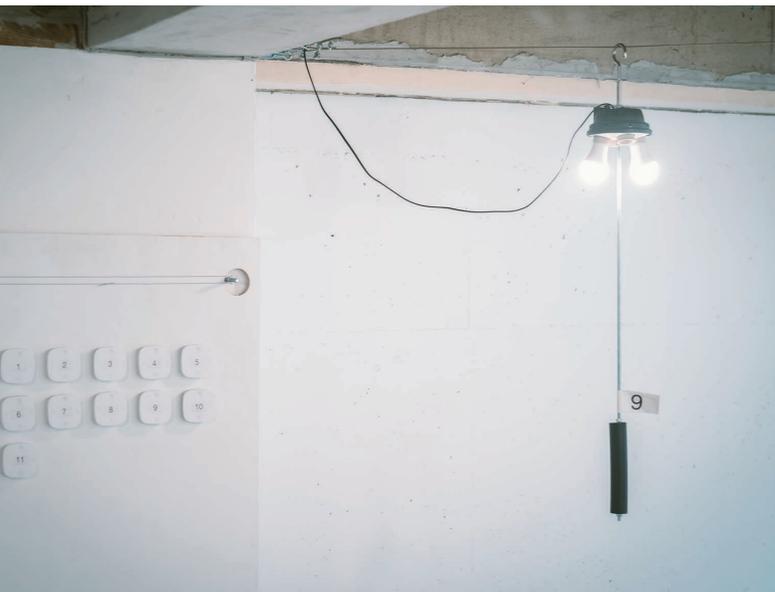


発明! その1

花形テーブル

全員の顔や手話が見やすいよう、テーブルは楕円に近いカタチで設計しています。長方形のテーブルの4片に、半円形のテーブルを足せる仕組みになっており、収納のしやすさも配慮しています。この特徴的な形状から、「花形テーブル」と名付けました。手話でのコミュニケーションを前提に検討を重ねるなかで生まれた、新しい発想のテーブルです。

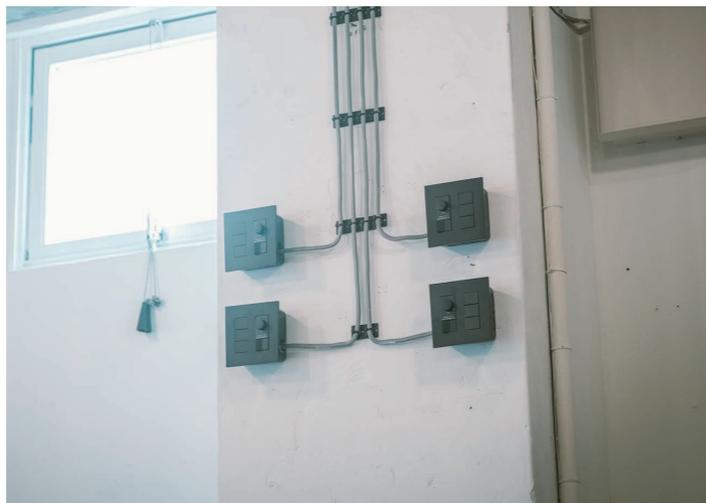




発明! その2

動かせる照明

照明は吊り下げ式になっており、取手部分を動かすことで、天井のワイヤーに沿って自由に位置を変える事ができます。顔や身体に影がかかると手話が見つづらくなるため、話者の位置に応じて、照明自体を動かせるようにしました。5005のイベント状況に合わせて柔軟に調整できる仕組みとなっています。



発明! その4

動く看板

5005の入り口には回転する看板があります。これは5005の名前の由来(手を0から5にひらくと手話で何かが出来ていく表現に見えること)から、0と5を表す手を高速回転させて0→5の様子をみせています。



発明! その3

合図としての照明

空間の中央に全ての照明スイッチを集約したことで、講演が始まる前など大勢の人の注目を集めたい時に照明を明滅させることができるようになっています。中央にまとまっていることで、操作しやすく便利です。



発明! その5

高さのちがう椅子

イベントの際に、前に人が座っているとその頭で舞台や講演の手話が見えづらことがあります。5005では、椅子の高さを三種類にすることで、これをクリアしました。子供用の椅子だとサイズが合わないため、既存の椅子の脚を切ることで、低い椅子をつくりました。



発明! その6

透けるカーテン

カーテンは、手話の内容が読み取れない程度の透け感のあるものを選んでます。会話の内容まではわからなくても、人の気配がやわらかく伝わることで、空間に安心感がうまれています。



DeafSpace Design ろう者の身体×家

2025年2月、5005で「DeafSpace Design ろう者の身体×家」という展覧会を開催しました。この展覧会では、ろう者の家族が暮らす2つの「家」を取り上げ、その空間に散りばめられたろう者ならではの工夫やデザインのアイデアを、写真や映像を通して紹介しました。「心地よい空間」とは何か—そこには、ろう者ならではの身体性や感覚から生まれるデフスペースが存在していました。ろう者の方をはじめ、建築やデザインに関わる方々など、合計200名以上の方にご来場いただき、5005にあるデフスペースも体験していただくことができました。実際に体験することによって、写真や言葉だけでは伝わりにくい空間の感覚や、ろう者の身体感覚に根ざした工夫を、より具体的に実感していただくことができました。

Thinking and Deepening



家の中の創意工夫

それぞれの「家」に見られるデフスペースの工夫をまとめ、写真とキャプションで紹介しました。また、家づくりの際の工夫や想いについて伺ったインタビュー映像を展示しました。

来場者からは、「家を自分の身体や言葉にあわせて変えるという発想がなかった」という感想がありました。また、「将来はデフスペースの建築デザイナーになるんだ」と夢を膨らませながら、玄関の段差をカーブにしたらどうか、透明の庇をつくってみようなど、家族で自分たちの家について語らう姿も見られました。

私の家にも同じような工夫があってこれがデフスペースなんだと思った



今まで「自分の身体を（ある意味“しょうがないから”）その空間に合わせる」ということが起きていたと思った。



「あるある」展示

ろう者の生活空間における身体の使い方が、聴者どのように異なるのかを改めて見つめ直すことで、新しいデフスペースのアイデアが生まれるのでは?という問いをもとに、ろう者の生活あるあるを紹介し、共感したら黄色いシールを貼ってもらうコーナーをつくりました。実際に、すべての「あるある」に多くの黄色いシールが貼られており、デフスペースについて、多くの方とともに考える時間になりました。

トークイベント



目で聴く家に辿り着くまで

実際に家を建てた湯山洋子さんから、どのように建築家の方と家族の要望を形にしていったのかについて、図面や実例、やりとりを含めてお話を伺いました。欄間から情報が入ってくる等の日本家屋の工夫が活かされた部分や、子どもたちの成長を想定してどのように変化できるように準備したか等、経験による語りから多くの学びを得た回でした。



建築がデフスペースと出会う時

建築キュレーター、けんちくセンター CoAK 代表の川勝真一さんとデフスペースと建築の可能性について議論しました。これまでの建築様式の背景や、一人ひとりのニーズの見つけ方、けんちくセンターに行っているワークショップなど、デフスペースをひらいていくための様々な方法を学びました。



ろう者の視点からみた建築 —過去・現在・未来—

東日本聴覚障害者建築協会代表の岩泉仁さん、一級建築士で博士号取得の杉山祐一郎さんとデフスペースという言葉がうまれる前に行われてきた建築をまなごするろう者の実践や、コミュニティの変遷について、ろう者のお二人とともに、考えていきました。



開催概要

DeafSpace Design ろう者の身体×家

展示会の開催日時

日時 2025年2月26日(水)~3月2日(日)
10:00~20:00 ※最終入場19:30

参加費 無料

会場 5005 (〒110-0001 東京都台東区谷中3丁目24-1 野口ビル 1-1A)

助成 公益財団法人 窓研究所

主催 東京都、アーツカウンシル東京(公益財団法人東京都歴史文化財団)、一般社団法人 ooo

デフスペースを考え、深める

DeafSpaceのある暮らしをコラージュしよう

展覧会で明らかになった、デフスペースの考え方や自分の身体感覚やニーズを設計者にどう伝えればよいかわからない」という悩み。その言葉をきっかけに、暮らしのイメージを視覚的に共有するツールが必要だと感じ、コラージュワークショップを企画しました。「みんなが楽しむ家」の住人を招き、当時設計者に伝えていたスケッチブックを紹介していただきながら、参加者は普段の生活やろう者の身体感覚をもとに、デフスペースのある空間を自由にコラージュで表現しました。それぞれの経験や工夫を語り合うなかで具体的なアイデアが生まれ、自然と対話が広がっていきました。この取り組みは、デフスペースを共に考え、伝え合うための新たな可能性を感じる機会となりました。これからも、暮らしの中にある感覚や願いを「見える化」しながら、ろう者が主体的に空間づくりに関わっていけるような場を、つくっていききたいと思います。

Thinking and Deepening



おわりに

本冊子で紹介した「みんなで楽しめる家」で私は育ちました。デフスペースという言葉を知り、家族が10年の時をかけてつくってきた創意工夫に溢れた家が、デフスペースと呼ばれるものであったこと、世界中に同じ言語や身体からなる工夫が実践があることを知った時、つくるといふ営みを通して自分たちの言語や身体を発見していくそのプロセスの力強さを改めて感じました。

この冊子は、それぞれの家族が生活の中でうみだした創意工夫が形となって現れた家を取材させていただき、まとめたものです。家のどこにいても家族と手話で話ができる空間、子どもの安全を見守るための空間設計、格子や障子を通して感じる気配など、手話や目で情報を得る身体にあわせて設計していくことで、それぞれの皆さんが安心して自分らしく過ごすことのできる場所を自らつくり出していることがわかります。そして、冊子をご覧頂いた皆さんもお気づきのように、多くの工夫が共通していることもみえてきました。

新しい家を設計する時、子ども部屋のレイアウトを考える時、ご飯をみんなで食べる時、このデフスペースという考え方を少し頭の片隅に置いていただくことで、“心地いい安心”をともにつくり出していくことができるかもしれません。この冊子を通してイメージが広がっていき、皆さんの“心地いい”が広がっていくことを願っています。

めとてラボ 和田夏実

デフスペース探しの旅は
まだまだ続いていきます。

自分の家にもこんな工夫が
あるよ、これもデフスペース？
と思われた方は、ぜひご連絡
頂けたら嬉しいです。

ooo.institute@gmail.com

参考文献

- ・ Bauman, Hansel. Gallaudet University DeafSpace Design Guideline, Volume 1. Hansel Bauman Architect, 2010.
- ・ Bauman, Hansel. “Deaf Space: An Architecture toward a More Livable and Sustainable World.” In Deaf Gain: Raising the Stakes for Human Diversity, edited by H-Dirksen L. Bauman and Joseph J. Murray, 375–401. University of Minnesota Press, 2014.
- ・ Malzkunn, Matthew. Cultural Customization of Home. Master’s thesis, Gallaudet University, 2009.

福島 愛未 ふくしまめぐみ

筑波技術大学で建築を学んだのち、日本財団聴覚障害者海外奨学金事業の助成を受け、ギャロデット大学（アメリカ）でデフスペースデザインを学ぶ。帰国後、筑波技術大学大学院で日本のデフスペースについて研究。卒業後、公益財団法人ダスキン愛の輪基金の助成を受け、Frontrunners（デンマーク）でメディアを専攻するとともにヨーロッパ各国のデフスペースを研究。現在は日本国内でデフスペースの啓発活動と研究を行っている。

和田 夏実 わだなつみ

コーダ（CODA : Children of Deaf Adults）。ろうの両親のもとで手話で育ち、家族が10年かけて、さまざまな工夫を凝らして、家をつくる様子、家で様々な国の方々と手話でお喋りしながら育ってきた。現在は、デザインとケアに関する研究をミラノ工科大学にて行っている。



めとてラボ

視覚言語（日本手話）で話すろう者・難聴者・CODA（ろう者の親を持つ聴者）が主体となり、一人ひとりの感覚や言語を起点とした創発の場（ホーム）をつくることを目指したラボラトリーです。コンセプトは、「わたしを起点に、新たな関わりの回路と表現を生み出す」こと。素朴な疑問を持ち寄り、目と手で語らいながら、わたしの表現を探り、異なる身体感覚、思考を持つ人と人、人と表現が出会う機会やそうした場の在り方を模索しています。

東京アートポイント計画

東京アートポイント計画は、社会に対して新たな価値観や創造的な活動を生み出すためのさまざまな「アートポイント」をつくるために、東京都と公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京が、地域社会を担うNPOとともに展開している事業です。実験的なアートプロジェクトをとおして、個人が豊かに生きていくための関係づくりや創造的な活動が生まれる仕組みづくりに取り組んでいます。

デフスペースリサーチは、「東京アートポイント計画」として実施する事業

「めとてラボ」のプロジェクトです。

めとてラボ デフスペースリサーチ

福島愛未、和田夏実、菅野奈津美、井上絢子

撮影クルー：加藤甫、丸山隆一、Samuel Ash

取材

みんなで楽しめる家…福島愛未、菅野奈津美、加藤甫、丸山隆一、小松智美

目で聴く家… 福島愛未、菅野奈津美、加藤甫、丸山隆一、小松智美、井上歩

気配を感じる家…福島愛未、井上絢子、Samuel Ash

取材協力… 和田令子、和田浩三、湯山洋子、ニコラス・ユヤマ、Hさん、Nさん

主催 | 東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京、一般社団法人ooo

助成 | 一般財団法人ハウジングアンドコミュニティ財団

DeafSpace

—ろう者の身体感覚から考える空間—

企画制作…めとてラボ

編集・執筆…福島愛未、和田夏実

デザイン…蔭山大輔

イラスト…宮川幸

印刷・製本…グラフィック

発行日…令和8年3月25日

発行…公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京

〒102-0073

東京都千代田区九段北4-1-28 九段ファーストプレイス 5階

Tel：03-6256-8435 Fax：03-6256-8829

https://www.artscouncil-tokyo.jp

ISBN：978-4-909894-65-6 C0070

営利・非営利問わず、本書のコンテンツを許可なく複製・転用・販売などの二次利用することを禁じます